

## 理事長就任にあたって

丹羽 寛文

本年4月の第53回日本消化器内視鏡学会総会に際し開催された定例理事会、評議員会、総会において、崎田前理事長の後任として、日本消化器内視鏡学会の第3代理事長に選出され、この度就任致しました。

身にあまる光栄に存じますと共に、改めて責任の重大さに身の引きしめる思いでおります。微力ではございますが一所懸命務めさせていただきます、日本消化器内視鏡学会の一層の発展に寄与出来れば幸いと存じております。

振り返ってみますと、日本消化器内視鏡学会は、昭和30年に設立された胃カメラ研究会が発展的に解消し、昭和34年に日本胃カメラ学会として発足したのが最初であります。発足当時は、それこそ海のものとも山のものとも分からなかった当時の不完全極まりない胃カメラという新しい機器を巡っての同好の士の集まりで、会員数も僅かに280名ばかりの小さい学会でした。しかしこの幼い学会は、会員諸氏の熱心な活動に支えられ、胃カメラ検査が臨床的価値のある診断方法として確立されるとともに、会員数も次第に増え、さらに消化管以外の内視鏡を包括した学会を目指して、昭和36年に日本内視鏡学会へと発展致しました。しかしそれでもその当時は会員数1,000名にも満たない小さい集団に過ぎませんでした。さらに学会として十分な活動が出来る様社団法人の認可が下りたのは昭和37年の事でした。この当時財団設立の事務的事項を担当し、丸の内にあった某法律事務所に足繁く通ったことをつい昨日のこの様に思い起こします。しかし社団法人となったものの会員数は4,000名に満たず、もちろんこの当時この学会が今日の様な大きい学会に発展しようとは夢想だにしませんでした。さらに悲願とした日本医学会分科会への加盟が同じく内視鏡を扱う泌尿器科、耳鼻科の思惑もあって申請毎に却下され、やむなく対象臓器を消化器に絞り日本消化器内視鏡学会と改名したのが昭和48年でありました。以後幾多の曲折の後昭和55年に待望の日本医学会分科会に加盟出来たものの、会員数が10,000人を越えたのはかなり遅く昭和60年になってからでした。その後各学会と歩調を合わせた専門医制度の発足とともに会員数は飛躍的に増加し、いまや本学会は会員数25,000余名という日本医学会分科会の中でも屈指の大学に成長致しました。

しかしこの様に学会が大きくなると共に、会員の皆様の学会に期待するところも様々となってまいりました。すなわち学会を純粹に研究集団として捉え、研究発表の場、研究助成の場として期待する方がおられる一方、学会を教育の場と捉え、その目的に適ったありかたを主体にすべきであると考えの方も多く、さらには専門医制度の発足とともに、その資格取得の場所としてのみ学会を考える方など、会員の意識、学会に対する要望も多岐に亙る様になりました。このことが学会の性格をより複雑にし、その運営を一層難しくしてきたことは否定出来ません。

この様なことから、学会が会員の皆様の要望に全て応えることは、今日非常に難しくなっており、またそれとともに学会の運営に関して会員の皆様に多くの不満がくすぶってきていることも、よく承知しております。

勿論その一端は会員の皆様の学会に期待する所が多岐にわたることもありますが、組織があまりにもマンモス化したため、小回りがきかず会員の声がなかなか運営に反映しにくくなったことが大きい要因であって、いってみれば学会組織が半身不随におちいつていることも否定できないと思います。

私としてはこれまで会計担当理事として、なによりも学会の財政的基盤を強化することに努め、崎田前理事長のご理解もあって、出費を出来るだけ押さえることで蓄積を心掛け、会員の皆様にかなり無理をお願いして参りました。その結果他の多くの学会が今日財政的に苦しんでいる時に、何とか今の所曲がりなりにも今後の学会運営の基盤を作る事ができたと思っております。この点ご不便をお掛けした会員の皆様にお詫び申し上げますとともに、ご協力戴いたことに篤く御礼申し上げます次第です。

今後は多少積極的な運営を心掛けても、ある程度余裕をもって当たれると考えております。しかし会員数は今後は大幅な増加は望めず、プラトーに達すると思っております。したがって会費収入の大幅な増加は当然期待出来ず、単年度収支のバランスの範囲で出来るだけ無駄を廃し、その一方必要な事項には出来るだけ使うという姿勢で臨みたいと思っております。

この様なことから、役員各位の協力を戴いて、適切な運営を図り、まず差し当たりの会員の皆様の不満を解消すべく努力して行きたいと考えております。

さらに学会の運営に当たっては、会員の皆様の要望が出来るだけ反映出来る様に、まずなによりも開かれた学会にしていく様に務めたいと考えております。

差し当たり現在課題となっている諸事項を列記してみます。まず学会運営の基本にかかわる大きい問題として役員を選考、総会会長の人選などがあります。これらの人事を誰もが納得の行く様に公平に行うために、どの様に凶り決めていくべきか、特に学会の活性化のために若手の登用をどこまで思い切っていくか、またそのために派生する諸問題をどの様に解決していくのかなどが最も急を要する重要事項であると思います。まずこの辺りを十分論議したいと思っております。

さらに研究の助成をどうしたらよいか、研究発表の場としての学術集会、学会誌をどの様に発展させていくのか、特に英文誌と邦文誌との関連を巡っては初心に帰った議論が改めて必要かと思っております。さらに教育の場として学会誌をどの様に位置付け、誌面についてどの様な刷新をはかるのか、教育の場、手段としてのセミナーの一層の充実、あるいは最近偶発症をめぐって要望の多い大腸内視鏡検査に関する効果的な教育手段の確立、その教育の場の提供等々も大きい課題であると思っております。

その他にも親学会と各支部会との有機的な連携、内視鏡外科学会との関連、総会運営に関してはすでに定着している DDW の中で、内視鏡学会としての主体性の確保、特に演題配分等を含めた他の消化器系諸学会との調整、さらには DDW 時の総会と消化器内視鏡学会単独時の総会の運営の在り方の違い等々を巡っても考えるべき問題は山積しております。

さらに研究、教育とは別なことではありますが、会員から要望の多い保険点数の引き上げに対しても学会としての一層の努力が必要でしょうし、内視鏡技師制度の今後の在り方についても考えるべき問題は多々あります。

勿論すでにこの様な諸問題の解決を目指して、現在学会の中には各種の委員会が設けられ多くの方に参加していただいております。しかしそれぞれの委員会が独自に活動し、そのためかえってその活動が学会運営に適切に反映しにくい面もあるかとも思われます。さしあたり関連ある各種の委員会相互の連絡を密にし、より有機的な運営を心掛けていきたいと思っております。またこの様な委員会活動に対しては広く若手の活躍をお願いしたいと思っております。そのために思い切った改革が必要と考えますが、差し当たって会員の皆様の意見を広く反映すべく理事会、評議員会、総会がそれぞれの機能を十分発揮できる様な運営を心掛けていく積もりでおります。

まず手初めにこれまで春、秋の総会時にごく短時間の審議にならざるを得なかった理事会運営の改革を目指し、頻りに理事会を開催し、それを通じて会員の意見を学会の運営に反映させたいと考えております。そのため近日臨時理事会を開催し、時間をかけて徹底的に問題点を議論する予定でおります。また今後もこの様な機会をできるだけ頻りに持つ予定でおります。会員の皆様には個別にでも、あるいは各地方支部を通じてでも結構ですので役員諸氏にまず率直なご意見を寄せていただく様にお願い致します。

またこの他にも、何らかの形で会員の皆様から積極的にご意見を伺う機会を作りたいと考えております。

なお昨年開催されたアジア太平洋内視鏡学会議を契機として、アジア各国の日本消化器内視鏡学会に対する期待はますます大きくなってきております。香港の中国復帰を踏まえて、中国のアジア学会への加盟の問題も当然生じ、それと共に台湾との関係が複雑微妙になって参りますが、それらを踏まえた上で各国の日本消化器内視鏡学会に対する期待に今後どの様に応えていくか十分考慮した上で行動を起こす時に至っていると思っております。また世界学会でも、いま繁栄にあると思われる内視鏡学の将来に対して不安と今後の指針の確立に迷いが起こっております。この事は先日の世界学会の役員会でも深刻な危機として認識されました。いずれにしても今日この様に隆盛に見える内視鏡学ではありますが、その将来に互った幅広い展望を踏まえた上で、内視鏡学とは何か、その在り方を改めて問い直した上での学会運営の努力が必要と思われまます。

さらに世界的に見ると内視鏡学の領域の中で治療学の隆盛があり、日本はこの点やや立ち遅れている感があるのは否めません。診断学と治療学の有機的な連結を今後どの様に凶っていくのか、この辺りにも将来の大きい課題があると思っております。

以上述べて参りました諸問題の解決を含め、一層の進歩発展を目指し新しい方向に向かって日本消化器内視鏡学会が進んで行ける様、微力ながら舵取役をやらせて頂きますが、当然ながらこの事は会員の皆様の絶大なご協力がなければ出来ることではありません。会員の皆様のご協力をお願いするとともに、絶えざるご指導、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。私の理事長就任のご挨拶とさせていただきます。